



地域日本語支援ニュース こだま 第 261 号

2014.9.11



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

====目次=====

1■ともに生きる■

国際結婚をして、気がついたこと 立花秀正

2■進学進路ガイダンス情報■

高校進学説明会情報(10月・11月・12月)*更新情報のみ掲載します

=====

1■ともに生きる■

国際結婚をして、気がついたこと

AJALT 所属日本語教師
立花 秀正

今号登場の立花秀正さんは、1988年にAJALTに入会し、インドシナ難民への日本語教育などに携わった後、国際交流基金日本語専門家として、通算約16年という海外生活を送りました。東南アジアを中心に、マレーシア、インド、中国、ラオスと滞在し、その間に生涯の伴侶も見つけました。長い海外生活を終えて、再び日本での活動を開始した今、国際結婚について想うことを語ってくれました。

-----☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「あれ、どうしてそんなに少ないの？」

「だって、怖い！」

2009年8月に妻が初来日してすぐの頃の会話です。彼女は近所のスーパーに一人で夕食の食材を買いに行きました。買うものを選ぶときに、円の表示を頭

の中で中国の通貨である“元”に換算して、日本の物価の高さに驚いてしまい、たくさん買えなくなってしまったとのことでした。

初来日したとき、彼女の日本語は片ことでした。私の母や妹ともスムーズには話せませんでした。以来約5年が経過しました。その間、私の仕事の関係で3年ほど日本を離れていたのですが、毎日日本語で会話をしているせいか、だいぶ上手に話せるようになりました。

今から6年前、2008年に私が中国の大連で仕事をしていたときに、結婚しました。二人とも再婚です。サクランボの季節の6月に紹介してくださる方があり、付き合うようになりました。私は中国で仕事をしていたというものの、同僚の中国人の先生方が日本語が達者だったので、毎日の業務は日本語でやっていました。したがって、私の中国語は初心者レベルというか限りなくゼロに近かったのです。彼女の日本語はと言うと、だいぶ前に「みんなの日本語・上」を学校で勉強しただけでしたから、日本語を話すことは全くできませんでした。

会っているときは、筆談が中心でした。携帯電話のやりとりは頻繁にしました。これは専ら中国語です。話せなくてもピンインは何とか分かったので、多少の誤りはあっても、何とか中国語の文章を作成することはできました。あの頃のやり取りを記したノートが3冊ほど残っていますが、今読み返すと、「よくこんな文章が書けたなあ！」と自分でも感心してしまいます。あのまま中国語の勉強を続けていたら、今頃は結構上達していたのではないかとちょっと残念な気持ちです。

大連に滞在しているときに気づいたことが二つあります。

まず、家族関係についてです。妻には7歳年上の姉がいます。その姉と毎日のように電話で連絡をとり、時には一日に何回もということもあります。また、割と頻繁に行き来をしています。私には2歳年下の妹がありますが、日本で生活をしているとき、よほど緊急なことでもない限り、電話をすることはありません。そんな私たちの様子を見ていて、妻は「日本人は冷たい」と言います。向こうは姉妹、こちらは兄と妹という同性と異性という違いはあると思いますし、また、これは私達だけの例で、他の中国人、日本人には当てはまらないことかもしれませんが、ちょっと考えさせられました。

二つ目は中国のテレビ番組のことです。中国は現在、23の省、5つの自治区、4つの市、2つの行政特別区に分かれています。テレビをつけるいろいろな省

や市のテレビ局が制作した番組を見ることができます。テレビ局の数は膨大で、全部でいくつあるのか分かりません。その多数あるテレビ局のどこかで、ほとんど毎日、「日中戦争」を題材にしたドラマを放映しています。日中戦争が終わったのは1945年ですから、今から69年も前のことになります。

しかも、ドラマの中の日本兵は残虐極まりなく描かれています。中国の子どもたちはこれを見て大人になるわけです。中国国内で外国からの情報を制限されて育ったとしたら、どんな思想をもった大人になるのか簡単に想像がつきます。大学生になって日本に留学した人達は日本に来てから、考えをだいぶ修正しているようですが、ずっと国内にいる人々の方が圧倒的に多いわけですから、テレビが及ぼす影響は大なるものがあります。実は結婚するときに、彼女の娘は小学生でした。彼女が言うには「娘は外国人が嫌いで、特に日本人が嫌い」とのことでした。ああいうテレビ番組を見て、育ったらそうなっても不思議はないと思いました。

今、日本のどのテレビ局で日中戦争のドラマをやっているのでしょうか。また、沖縄に上陸し、広島と長崎に原子爆弾を落とした米国のことを、悪く言うドラマや映画を日本が作っているのでしょうか。戦争の舞台となり、大きな痛みを伴った中国とそうではなかった日本の違いはありますが、この戦争に対する両国の認識の大きな違いを実感せざるをえません。

今、日中関係が軋んでいます。政府同士の交渉では双方の大義名分、メンツもあり、スムーズにできないという事情もあるかもしれません。両国民とも政府に踊らされるのではなく、自分でよく考え、市民レベルでの交流を深める道をもっと模索すべきだろうと思います。

彼女との結婚を通して、「世界の中の日本」が今までよりもっとよく見えるようになりました。私は仕事柄、これまで15～16年間、おもに東南アジアの国々で仕事をしてまいりましたので、それなりに「外から日本を見る目」を養ってきたつもりでした。ところが、外国人と家族になって初めて見えてきたものがあったのです。

その端的な例が、外国を訪問する際の「ビザ」の問題です。日本人が海外へ行く場合、大抵の国々は「15日以内の観光目的の入国についてはビザ不要」となっています。妻と一緒に海外旅行を計画した時に、中国の旅券所持者はどの国へ行くにしても、ほとんど事前のビザ取得が必要ということを初めて知り

ました。ヨーロッパのいくつかの国々を調べた結果、ビザを取得するために提出しなければならない書類の多さにため息が出ました。将来、私たち夫婦に時間とお金ができても、これでは無理だなと半分あきらめています。日本人以外の友人、知人に聞いたところ、中国に限らず、アジアの多くの国々がこれに当てはまるのだそうです。彼らは「日本人が羨ましい」と言っていました。

日本と違い、外国ではどこでも安心して水道の水が飲めるわけではない、また、夜、外出すると危ない地域がたくさんある等々、これらのことは多くの日本人が知るようになりました。しかし、これらはほんの一例にしかすぎません。「日本では当たり前と思われていることでも他の国では違う」ということがもっといろいろあることを、日本人は知った方がいいと思います。

ちょっと話が固くなってしまったようです。ここでまた、私達のことに戻します。妻は昔から日本が好きでした。そして、今は大好きです。その理由はどこへ行っても街が清潔できれいなこと、きれいな青空があることなどです。来日当初はどこへ行くにも一緒でしたが、今は一人でどんどん出かけていきます。現在、私は日本語教師をしております。正直言って、高給取りではありません。どちらかと言うと薄給です。しかし、妻は割と高い化粧品を躊躇することなく買います。5年前、初めて日本へ来た時、日本の物価の高さに悲鳴を上げていた「頼りなさそうな妻」は一体どこへ行ってしまったのでしょうか。

そういえば、来日して間もなく、銀座を案内した時のことを思い出しました。あの時も、三越で妻は有名な海外ブランドの化粧品を何の躊躇もなく、“私のカード”で買ったのでした。近所のスーパーで食材を買う時に「怖い！」と言った彼女とは、全く別人がいたのです。

今、6年前に大連で初めて会った時の彼女のことを大変懐かしく思い出している次第です。
